
神様からの贈り物

後藤詩門

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様からの贈り物

【Nコード】

N4993E

【作者名】

後藤詩門

【あらすじ】

その日、私は殺人を決意した……

星暦2008年6月21日。世界中の人が楽しみにしていた一大セレモニーが、開かれようとしていたまさにその日。

皮肉にも私は、生まれて初めて殺人を犯す決意を固めていた。

私の名はメリーズ博士、科学者である。

さて人を殺すと先ほど述べたが、厳密に言って我々と同じ人の事ではない。

人という言葉は広義の解釈がある。直立歩行ができ道具を使用し、そして言語能力を有するに至ったもの。それが人なのである。

だから、我々のような存在を含めて、この宇宙には他にも人と呼べる存在があるのだ。例えば、そう宇宙人。

実は私が殺そうとしているのも、この宇宙人なのである。我々はその宇宙人を……神様と呼んでいた。

まあ、いきなりこんな事を言っても、読者諸兄には訳が分からないであろう。では、理由を簡単に説明しよう。

今から1年前、科学者であり冒険家でもあるパンパス博士という人物が、偶然にも銀河の端に一つの惑星を発見した。

そしてそこに、何と知的生命体つまり宇宙人が存在しているのを確認したのだ。我々の長年の夢がかなった瞬間である。

驚くべき事に、彼ら宇宙人は圧倒的な科学力を持っていた。我々よりはるかに進んだ技術である。

そんな彼らが、何故今まで宇宙に乗り出して我々と接触しなかったのか、あなたも不思議に思う事だろう。さもあらん、我々科学者たちもそう思っただけだ。

だがパンパス博士が彼らと交流するうちに、我々は驚くべき事

を知らされる。

それは……

実は何千年も昔、彼らはすでに我々の星を発見していたという事実だ。

どうだ、驚いたかい？

だから、先ほどパンパーズ博士が1年前に彼らを発見したと紹介したが、厳密に言うとその話は間違い。本当は彼らの方が、とうの昔に我々を発見していたのだ。

いや……これもまた語弊がある言葉だな。彼らが我々の星を発見した時に、我々は存在していなかったのだから。この事にも少しの説明が必要だろう。

その昔、彼らはたぐいまれな科学力を駆使してこの大宇宙に乗り出していた。ちょうど我々が今、そうであるように……

そこで見つけたのが我々の星。だが当時、我々の星には生命体（微生物等の原始動物は除く）がいなかったそうだ。生命を育む環境は整っていたというのに……

そこで、この素晴らしい環境を勿体無く思った彼らは、自らの星に住む数十種類の生物を放したらしい。

我々が今もよく目にする様々な動物は、この時に放たれたのだ。

犬や猫や馬や羊、それから牛や鳥たちに海の生き物や爬虫類たち……

…そして猿。

宇宙人たる彼ら自身は誰も移住する事はなかったが、彼らが放した動物たちは我々の星で伸び伸びと暮らしたそうだ。何年も、何百年も、何千年も……

するとそんな動物たちのうち、一つの種が驚異的な進化を遂げた。四足歩行から二足歩行へ。小さな脳から大きな脳へ。そして、何でも掴める器用になった指先を手に入れる。

そんな進化の最終形態が……今の我々という訳だ。まったく衝撃の事実だろう？

この現実には神学者たちは驚愕をうけた。無理もない、神様は全能者ではなく宇宙人だったなんて……

信じられていた全ての教理が覆った瞬間である。その知らせに神学者たちのトップ、教皇フィリポ・トマス三世は皇座から立ち上がるとそのまま床に崩れ落ちたという。

だが、進化論者たちはもろ手を上げて歓迎した。まあ、これは当然か。では一般市民はどうだろう？

ある程度予想されていたことだが、市民もまたこの事実を柔軟に受け入れたのだ。

宇宙人、それも我々が存在するきっかけを作ってくれた人を見つけた。つまり創造主、イコール神だ。

市民は歓喜と歓声をもつてこの神様たちを歓迎する。

神様見つけた！ こんな言葉がこの年の流行語大賞にもなるくらい流行る事になる。

ほとんどの市民が歓迎ムード一色。

そんな市民の反応に政治家たちも動いた。すぐに神様をこの星にお迎えしようと外交官をかの星へと派遣したのだ。

神様たちは快く承諾し、2名の代表者を我々の星に送り込む事を決めた。いわゆる親善大使だ。

そのような訳で、我々の星では神様フィーバーが起きている真っ最中なのだ。

そして、そんな歴史的な大発見を成したパンパス博士は、英雄として祭りあげられていた。

それが……今回の私の殺人の動機である。

つまりは嫉妬。

彼とはハイスクール時代からのライバルである。彼だけが成功する事など私には絶対に許せない。まあ、よくある殺人の動機だろう。だが、なぜパンパス博士本人ではなく神様を殺す事を私が選ん

だのかつて？

それは自分と同じ人を殺すよりかは、神様とはいえただの宇宙人を殺る方が気は楽だからだ。

市民などは神様、神様と騒いでいるが、私に言わせれば彼らは蒼白い皮膚に大きな目を持つ気持悪い動物に過ぎない。

ム力つくライバルとはいえ、私と同じ種族なるパンパーズ博士を殺すのは良心のかしゃくがある。

それに神様を殺せば、パンパーズ博士の手柄にも傷がつく。しかも、私が彼に変装して神様を殺害すれば……どうなると思う？

彼は英雄から一転、神殺しの大罪人となるのだ。

それが私の狙い目。

私が手を下す事もなくパンパーズは破滅だ。

えっ、そんな変装技術がお前にあるのかだつて？

心配御無用。何も我々の仲間に私の姿を晒すつもりはない。殺す相手（神様）は一人。そして殺害現場を見せるのも、残った宇宙人（神様）の一人だけ。

実は交流を進めていくうちに明らかとなったのだが、この宇宙人たちは個体を識別する能力が我々よりはるかに劣るらしい。

自分たちの仲間ですら、人種が違うというだけで同じ顔に見えるそうだ。なので我々の顔つきなど、誰が誰かなどさっぱり分からないはず。

そこでこの神様の習性を利用して私は殺人計画をたてた。

神様たちは我々の星で最も高級なホテルに宿泊している。政治家や官僚それに腕利きの軍隊が守っているから手は出せない。

狙いはセレモニーが行われる会場控室。

ここには高い科学力を持つ神様たちからの贈り物が置かれている飯倉庫もあり、ごちゃごちゃしていて身を隠しやすい。

さらに、私も科学者としてこのセレモニーに招待されていたため

都合が良い。

それに警備は主に会場外に向けられている。中に入れるのは各界の著名人ばかりだから、明らかに会場内は手薄な警備体制。神様との接触も可能であろう。

セレモニーでは我々の顔の区別がつかない神様のため、入場者それぞれの胸にネームプレートをつけ、頭には個別の帽子をかぶる事になっていた。

私は既に、パンパース博士のネームプレートと帽子を手に入れている。これで神様殺しのパンパース博士役を演じる準備は万端であった。

そして、当日。

私は小道具を持って会場に向かった。予想通り、著名な科学者として有名な私は顔パスである。

セレモニー会場内はすでに大勢の人で賑わっている。ふと、人混みの方を見ると、パンパース博士が人々に賞賛されて偉そうに演説をぶっていた。

（ふん、お前がちゃやほやされるのもあと少しだけだ！）

私は不愉快な顔でその場をあとにする。

会場内の控室に向かうとさすがに警備が厳重になる。だが、私が「パンパース博士の使いできた」と言うとすんなり通してくれた。

この私が……偉大なるこのメリース博士が、パンパースの使い等と自己紹介するのは大いにプライドを傷つけられた。だが仕方がない。大事の前の小事として諦める。

そして、私は神様控室のとなりの倉庫に潜りこむ事に成功。すぐに着替えチャンスを待つ。周りは様々な荷物でごったがえしているので見つかる心配はない。

それにしても……

少し落ち着いた私が周りを見回すと、そこには摩訶不思議な世界だった。身につけるだけで異なる言語を自動的に翻訳してくれるマスクや、腰に巻くだけでお腹の脂肪を取ってくれる減量ベルト。他にも様々な魔法のような器具が揃っている。

流石は高い科学力を持つ彼らから我々への贈り物が安置されている所。うーむ、興味深い。

これから人を殺そうというのに、私は科学者としての知的好奇心に勝てなかった。つつい壁に立掛けられていた、大きな板状の箱を開けてみる。

そこから現れたものは、何と……

「わ、わああああ！」

つんざくような悲鳴が仮倉庫にしている部屋に響く。
もちろん、私の声。

（誰だ？ こいつは？）

私が開けた箱、何とそこには……我々の仲間が一人、ナイフを構えて立っていたのだ。

それも今の私の格好とうりふたつ。ひよっとして計画がバレたのか？

（だが……何かがおかしい）

私はナイフを握り締めながら、そつと手をかざしてみた。すると壁際に立つその男も、私と同じようにナイフをかざす。

今度は口を開けて見る。すると男も間抜けな顔で口を開けた。

（なるほど……）

私はすぐに合点がいった。これはパンパーズ博士の報告書にあった“鏡”と呼ばれる器具だな。

なんでもこの鏡、前に立つと我々の姿をそっくり写し返すという魔法の板なのだ。知識としては持っていたが、これほどのものとは……正直度肝を抜かれた。

すると、「誰がいるの？」と人の声。

（神様だ！）

さっきの私の悲鳴を聞き付けたのだらう。二人の気配が近づいてくる。

ちょうどいい。私は鏡の陰に身を潜めた。そして、計画を頭の中で思い返す。

一人をナイフでグサリと刺し、もう一人に私のつけているパンパーズ博士のネームプレートと帽子をしっかりと見せ付ける。それから、トンスラ。

なにくわぬ顔でセレモニーに参加すれば、顔の見分けもつかない神様はネームプレートと帽子から犯人を探すことになる。

そして、犯人はパンパーズ博士だと証言するに決まっている。私は連行されるパンパーズ博士を見ながら、受け取ったシャンパンを飲み干すのだ。

楽しい想像で胸が高まる。その時、倉庫の扉を開け神様が入ってきた。

「鼠かしら？」

呑気な会話をしている神様たち。いよいよである。

神様たちは入室すると鏡の箱が開けられているのにすぐに気づいた。

「あらあら、待ちきれないで誰か覗きにきたのね」

苦笑しながら呟く。残念だが違うんだなあ、と私も心の中で呟く。神様たちの姿が私の視界に入ってくる。どうやらどちらも雌、つまり女らしい。胸の部分に膨らみがあり、尻回りもふつくらしている。

うーむ、何度見ても気持ち悪い姿。まるで猿だな。私は初めての人殺しを前に、呪文のように呟く。

（これから殺すのは人ではなく猿。これから殺すのは人ではなく猿……）

そう言い聞かせチャンスを待つ。すると、タイミングの良い事に一人の神様が鏡の陰に隠れる私を発見してくれた。

「あら、あなたは？」

その一言が合図になった。私は躊躇することなく身を踊らせ、頭上にふりかざしたナイフを彼女に叩き付ける。

「キャ、キャー！」

今度は彼女らが悲鳴をあげる番。

グサッ

私の持つナイフが簡単に一人の神様の胸を貫く。まるでバターにバターナイフをつきたてるが如く簡単にめり込む。

殺人などあつけないもの。私はそんな感想を持った。意外と科学者より兵隊の方が向いているのかも……

刃先が十分な深さに達したのを確認すると、私はナイフを引き抜いた。ブシュという音と共に大量の血が吹き出してきた。私は体中に返り血を浴びた。

血など浴びて大丈夫か？

後で発見されやすくなるのではないか？

ハハハ、心配せずとも大丈夫。神様たちの血液は驚く事に我々の汗と同じ“黒色”なのだ。誰かに見られても、汗っかきな人だと思われるだけ。私はとどめにもう一度、神様にナイフを突き立てた。

足元からドサツと床に崩れ落ちる神様。もう一人の神様はただ呆然と立ちつくしているだけ。悲鳴すらあげられないほどの衝撃を受けている様子。ふふふ、計画通りだ。

私は最後に鏡に写る自分の姿を確かめた。

我々の汗と同じ真っ黒な彼女の血液がベッタリとついている。私は笑いを浮かべながら部屋を後にした。

手早く着替えると私はセレモニー会場の中央に陣取った。

多少、神様の返り血が衣服や皮膚についているが誰も気にとめはしない。少し空調が悪いせいもあって結構な人数の人々が汗をかき、せっかくのモーニングやドレスを黒ずませている。これなら大丈夫だ。私は確信した。

その時……ようやく警察官が会場内に入ってきた。

「ただいま重大事件が発生しました。皆様いましばらくそのままでお待ちください」

そんなアナウンスも流れる。そして、扉が閉められ我々は完全に閉じ込められた。

（犯人を外に出さないためだな。いい判断だ）と私は呟く。

場内の人々もこの異様な光景にようやくざわめき始めた。パンパース博士も怪訝な顔で辺りを見回している。

（ふふふ、パンパースめ、吠え面がくなよ）

ニヤリと笑う私。すると警官に伴われて神様が会場に登場した。パラパラと拍手がわくが、それどころじゃない様子だと皆すぐに気づく。血の気のない顔で神様が人々の群れをかきわけている。

捜しているのだ、パンパース博士のネームプレートと帽子をつけた犯人を。

パンパースが捕まるのももうすぐだ。何だかワクワクしてくる。ついに神様がパンパース博士の前に立った。私の胸の高まりは最高潮に達する。

（ついにパンパースが……って、あれ？）

何故だ？ 神様はチラリとパンパース博士を見ただけで素通りしたのだ。

訳が分からん？

私は呆気にとられた。

すると、その時。偶然にも私は神様と目があつた。その瞬間、何と神様が私を指さしたのだ。

（えっ、まさか？ あの自分たちと同じ種族の顔すら見分けがつかない彼女が、まるで違う種族たる私の顔を見分けたというのか？）

彼女は私を指さしながら近づいてきた。何やら叫んでいる。どうも犯人は彼だとしても言っている様子。周りの警官があっという間に私を取り囲む。

「な、何をする？」

私は両腕を警官に捕まれて、神様の前に立たされた。私を睨む彼女のその大きな瞳は確信に満ちている。

犯人が私だと分かっているのだ。
しかし……何故？

「本当に馬鹿な子ね」

彼女は怒りに震えながら呟いた。

（馬鹿？ この私が？ 計画は完璧だったはず。なのに何故バレた？）

神様は言った。

「貴方たちはその昔、私たち地球人が放したトカゲから進化したトカゲ人間よ。かなり進化したけれど……あなたたちの目は、私たちより色を識別できない！」

「な、何？ 色だと？」

「そう、あなたは私たち地球人の血が、貴方たちの汗の色と同じ黒

色と思ったのでしょうか。だからよく拭いもしないでここに立っている。でもね……私たちの血液は赤色なのよ、お馬鹿さん」

私はただうなだれるしかなかった。そう、彼女には見えたのだ。緑色の私の体にはつきりと目立つ同胞が流した赤色の血液が……

こうして私は連行された。この星始まって以来の神殺しの容疑である。死刑は確実だった。

時は星暦2008年6月21日。

神様たちの暦で言うと、西暦12008年6月21日だという。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4993e/>

神様からの贈り物

2011年1月16日09時19分発行